

# 緑の架け橋

会報第6号

2005年8月31日

第3回植林緑化派遣団〔2005年4月15日～20日〕

## 寧夏回族自治区において紅寺堡に続き 平羅県でも植林事業をスタート！

～日中関係が緊張する中、植林通じて「平和の架け橋」築く～



紅寺堡の観測定点より（2005年4月17日）

参加者は現地の人々の熱い期待と「緑の大切さ」を実感！テレビ局も同行取材


緑の架け橋推進センターは、4月15日から20日にかけて第3回となる植林緑化派遣団を総勢27名の参加で実施してきました。

派遣団は、今年度から新たな事業として手がけることになった石嘴山市平羅県での「寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業」の開工式を地元の盛大な歓迎のもとで成功させ、2年前から事業を進めている紅寺堡地区でも地元の学生とともに植林作業に取り組んできました。

おりしも、歴史教科書問題や靖国問題などで中国国内での反日感情が激化する中での派遣となりましたが、中国でのカウンターパートである中華全国青年連合会の全面的な受け入れ協力もあり、心配されたトラブルもなく、予定された行程を無事に終えて帰国しました。

また、第3回植林緑化派遣団には、緑化活動や森林保全に関する特集番組を毎年制作しているテレビ大分のスタッフの方も同行され、派遣団に大分県から参加した仲間を中心に取材を行い、帰国後に「砂漠を緑の大地に」と題するドキュメンタリー番組が地元大分を中心に放映されました。

今回の会報では「第3回植林緑化派遣団」の活動報告を中心にお伝えします。

 緑の架け橋推進センター

中国植林緑化活動協力事業

寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト／寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333社ビル405 TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079

口座：中央労働金庫市谷支店（普）0858119、郵便：00130-9-425994

## 第3回植林緑化派遣団 (2005年4月15日～20日) 活動報告

4月14日(木)

### 結団式(事前学習会)と壮行会を実施

出発を翌日に控え、東京において結団式(事前学習会)と壮行会を実施。結団式(事前学習会)では、お互い初対面で緊張気味の中、この間の紅寺堡地域での植林活動の報告や平羅県視察の様子などの説明を受けて、改めてまだ見ぬ中国の大地と植林活動への期待を高める。その後の壮行会ではセンター顧問や多くの先輩方からの激励を受け、参加者同士の交流も行われ、いよいよ成田へ出発。

今回の派遣団に同行取材するテレビ大分のスタッフからは「活動の主旨に賛同して取材をお願いした。密着させていただくのでよろしく」とのあいさつ。大分では地元紙にも派遣団のことが参加者のインタビューとともに掲載され、大きな注目を集めているとのこと。

4月15日(金)

### 空路北京へ、中国共産党対外連絡部と中華全国青年連合会本部を表敬訪問

いよいよ成田から出国し空路で北京へ。北京到着後に、特別団長をお願いした東門美津子衆議院議員(センター顧問)と佐藤団長(センター会長)は、中国共産党対外連絡部と植林事業の中国側のカウンターパートである中華全国青年連合会の本部を表敬訪問。

対外連絡部の劉副部長からは日中関係に触れ「こうした時期だからこそそじかに触れ合うことが重要。緑化活動は友好の重要な手段だ」との話があり、青年連合会の周名誉主席からは滞在中の安全について「皆さんが安心して活動できることを保証します」と力強く語っていただいた。

### 寧夏回族自治区・銀川空港に到着、深夜にもかかわらず盛大な歓迎を受ける

一行はその日のうちに、植林事業を行う寧夏回族自治区に空路で移動。銀川空港に降り立ったのは深夜にもかかわらず、現地の人民政府や青年連合会の方々などが大勢出迎えに来ていただき、私たちのこの間の植林事業の意義や、今回の派遣団への熱い期待を実感。



4月16日(土)

### 石嘴山市平羅県で「寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業」の開工式、地元の方々と記念植林を実施

この日は、寧夏回族自治区で新たに今年から3年計画で取り組むこととなった「寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業」の開工式のため石嘴山市平羅県に移動。



「平羅県」は寧夏回族自治区の首都である銀川市の北、約55kmほどに位置。古代からの度重なる洪水被害と厳しい気象条件(降水量は年間で176mmしかなく、温暖の差も激しく冬から春は砂混じりの強い季節風が吹く)によって土壌は悪く、塩害や沙漠化が進行している。この一帯では、寧夏回族自治区人民政府と平羅県が共同で植林緑化活動(保護林のに整備)に取り組んでおり、今回、さらに大規模な植林事業を展開するにあたり、紅寺堡での実績を持つ私

たち(緑の架け橋推進センター)に対して協力が求められたもの。

この日は地元から600人もの方が集まっていたが、一行は、地元中学生のブラスバンドの演奏で盛大に出迎えを受けた。開工式では石嘴山市の馬市長から「地球の緑化は我々人類の共通の課題。両国の青年の友好の火が末長く続くことを願います」とのあいさつを受け、佐藤団長からは「生態系改善のための植林活動が日中友好



や平和の礎になると確信している。一緒に木を植えながら永遠の友情を築きたい」と、これから3年間の植林活動の意義を訴えた。また、開工式では記念碑の除幕式も行われたが記念碑には参加者一人ひとりの名前が刻まれており、あらためて活動の重要さを感じるとともに自分たちの足跡が確実にこの地に刻まれることにひとしおの感慨を感じた。また、会場には将来の豊かな緑の大地の実現を願って描かれた地元小学生の絵の展示も行われ、期待の大きさが表れていた。

中華全国青年連合会の湯副秘書長によると「中国側でもこうした活動を通じて、環境の大切さを地元の住民に意識してもらうとともに、日中間の友好・協力の重要性を認識してもらうことも目的」とのことで、こうした小さな積み重ねが真の国際交流であり、将来の日中の平和にもつながると感じた。

その後は、日本からの派遣団メンバーと地元の中学生がグループになって共同でポプラの苗木を植えていった。地面は粘り気のある土でかなりの力を要するが、一緒に作業を行ううちに、言葉は通じなくてもコミュニケーションができるようになり、参加者は一様に大きな感動と充実感を感じて、この日の植林活動を終えた。

さらに、この日の昼は、石嘴山市主催の歓迎会を、夜には、銀川市内で寧夏回族自治区政府主催の歓迎の宴を開いていただき、さらにお互いの友情を深めることができた。

なお、この日の植林活動の様子は地元、寧夏回族自治区の翌朝のテレビニュースでも紹介されるなど、今後3年間の活動に対して大きな期待と注目が寄せられている。



4月17日(日)

いよいよ紅寺堡地区での植林活動に！この日も地元から大きな歓迎、一緒に227本を植林

寧夏回族自治区での2日めの活動は、緑の架け橋推進センターが設立され、2003年から取り組んできた「寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト」の実施地である吳忠市の紅寺堡地区での植林。「紅寺堡」地区は、それまで放牧などを生活の糧として非常に貧困な状態で点在して暮らしていた地元の住民を移住させ、農業を中心に生活の安定と生産性の高い街づくりを行う目的で寧夏回族自治区人民政府が新たに開拓した地域。荒涼とした荒地で、砂漠化が進行する地に、黄河からの灌漑設備を整備して、私たち緑の架け橋推進センターと共同で3年前から植林活動に取り組んでいる。センター設立時の事前調査団がこの地を訪れて以来、紅寺堡の街並みはみるみる大きく、そして近代的になっている。事前学習会でこの間の様子を見聞きしたが、やはり実際にその地に向かうとなると期待に胸が高鳴る。

3年計画の最終年度となる2005年度の植林地帯はここ2年間の場所から少し離れたところ。派遣団が現地に着くと、地元の青年連合会の方々や大勢の中学生が出迎えてくれた。早速、ポプラの苗木を中学生達とグループになって植えていく。この日はあいにく、風が強く砂塵が舞う中で、ゴーグルやマスクをつけながらの作業となった。また、植林地帯は砂が飛ばないように何日も水を入れていたため、さらさらした砂地ではなく雨上がりの乾ききった校庭のように土砂が固まっており、スコップで植林のための穴を掘るのも一苦労。それで



も派遣団一行は、紅寺堡に来るまでの荒れた大地を思い浮かべ、自分たちの植林活動の意義を感じながら一本一本の苗木をていねいに気持ちを込めて植えていく。地元の中学生たちともすっかり仲良くなって最後はあちこちで記念撮影が行われるなど、作り物ではない本物の国際交流を通じた友情が培われた。一緒に参加した子供たちから「今日はとてもうれしかった。この木は自分たちが大切に守っていくので安心してください」との言葉を聞いて、時間はまだまだかかるだろうが紅寺堡が緑の大地として発展していくことを確信し、自分たちにとっても一生忘れられない思い出になった。

### これまでの植林活動地を視察。しっかりと大地に根を張り緑の葉をつける木々を見て感動！

植林作業の後は、2003年・2004年と、これまでの2年間の活動で植林を実施してきた場所まで移動し、現地の状況を視察。佐藤団長によると、事前調査団で訪れた2002年には砂漠だけで何もなかったところだそう。

緑の架け橋推進センターとしては、2004年の春と秋に派遣団を送り込み、この地でポプラなどの苗木を地元の人たちと植林してきた。事前の話では地元の人たちの日常的な熱心な管理のもと、順調に生育していると聞いていたが、実際に現地を訪れてみると、土壌はまだまだ砂地に見えるものの、すでに2メートル以上に伸びたポプラが緑の葉を茂らせ、見渡す限りに整然と並んでいる。しっかりと新たな土地に根を張って過酷な自然条件のもとでも「生きている」木々の姿に大きな感動を覚えるとともに、私たちと同じように、これまでこの地を訪れて植林活動に参加してきた日本の仲間の「砂漠を緑に」という熱い思いを時間を越えて共有できたことが大変うれしく感じた。そして、今日自分たちが植えた枝も葉も生えていない苗木が、何年後に緑の葉を茂らせる様子を思い浮かべた。

最後に、2004年4月の開工式の際に除幕を行った記念碑の前で記念写真を撮って、紅寺堡の地を後にした。

派遣団参加者は口々に「本当に貴重なすばらしい経験ができた。将来もう一度この地を訪れて自分たちが植えた木がしっかりと育っている様子を確認したい」と、この2日間の植林活動を振り返って、心地よい充実感と達成感をかみしめていた。



**今度はあなた自身が現地で植林に参加しよう！**

## 第3回植林緑化派遣団に参加して

緑の架け橋推進センター 会長  
(第3回植林緑化派遣団 団長)

佐藤 晴男



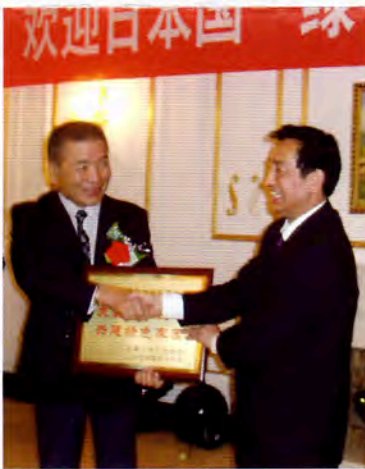
### 植林による友好交流は着実に！

今回の植林派遣団はこれまでの日中間の様子と少しばかり異なる状況下であった。それは小泉首相の靖国参拝や歴史教科書問題に端を発し、中国国民の中の反日感情を持つ人たちが幾つかの都市で「反日デモ」を行っている真只中での訪中（派遣）で、若干の懸念がなかったわけでもなかったが、中国側の受け入れ団体が全青連であるため安心して訪中することができた。

派遣団が訪れた北京市・銀川市・石嘴山市などは平穏で以前と変わらぬ様相であった。

銀川空港では夜10時過ぎに到着したにもかかわらず「熱烈歓迎」の横断幕で出迎えを受け、植林活動を通じた民間レベルでの友好交流が大きく寄与している感じを受けた。

北京市で表敬訪問した中国共産党対外連絡部・劉副部長や共青团中央の周第一書記との会談でも「こうした時期に来訪されたことを歓迎し、中日の友好の絆を強め交流の中身を充実させましょう」「緑化事業を通じて友好を発展させましょう」等の率直な意見交換を行えたこともあり、中国滞在中はこれまでと全く変わらぬ治安の中で植林活動や観光等を終えることができた。



### 1期（紅寺堡）の最終年と2期（平羅県）の初年度となった植林事業

今回の植林には二つの事業が重なっていた。第1期（2003年～2005年）の3年計画である寧夏回族自治区吳忠市紅寺堡地域での生態緑化事業の3年目の植林と、第2期（2005年～2007年）の3年計画である寧夏回族自治区石嘴山市平羅県渠口郷の生態緑化事業の初年度の植林、開工式、記念植樹の実施である。

紅寺堡地域では3年間で助成事業分約300haに植林が進み、中国側の自主事業と併せると大規模な区画整理や耕地造成、街づくりなどが同時に進行している。

事前調査（2002年11月）から、2年6ヶ月余りで、あの見渡す限りの荒涼とした沙漠地帯に緑と住宅が存在する様になっているのである。記念植樹したポプラに新しい芽が吹いている現実を目の当たりにすると生命力の強さに安堵と感動を覚え、次にむけた勇気と力（エネルギー）を授けられた気がする。

これは紅寺堡地域の人たちにとっては、仕事や生活に直結するだけにもっと大きなエネルギーになっていることだろう。



(事前調査時の紅寺堡地域の風景)

9月の補植で1期目の区切りをつけることになるが、沙漠地帯だけにこれからまだまだ灌水の充実や病虫害の防除など、新たな課題への対策が求められている。

一方で2期目の平羅県生態緑化事業も初年度の開工式と記念植樹を実施した。平羅県の沙漠は紅寺堡



の沙漠と異なり、黄河の氾濫でできた泥砂地帯で乾燥しやすく、ちょっとした風でも砂塵（パウダー状）が発生しやすく動植物の生態系に影響するような黄砂である。そのため風砂防護林の整備が最も急がれる地域でもある。

開工式には地元の住民、児童（小・中学生）、行政機関関係者、全青連（本部、地域）の代表者等、約800名が参加する中で、各代表のあいさつや決意、記念碑の除幕、記念植林等を行ったが、広大な黄河流域の植林第一歩と言える。

### 環境・平和問題は地球規模で!!

緑の架け橋推進センターというボランティア組織は中国大陸では小さな「点」に過ぎない。この「点」は植林（生態系の改善）という起爆剤となり、植林事業を継続することによってさらに「線」になり、地域の人たちとの共同作業により「面」になっていくものだ。このことが、あの年間雨量 200 mm以下の沙漠地帯に、木々が育ち、林になり、森が形成され、山になっていくことだと思う。飛散する砂塵は減り、植物や農作物が育ち、食料の確保と生活の安定につながっていくことになる。まさに環境問題は平和問題と同じように、地球規模で考え、地域で行動（活動）することを教えてくれたと思っている。

植林した各種の樹木が大きくなるように、日本と中国の友好が太く大きくなることが、今一番大切なことだろう。

※今回はテレビ大分（TOS）が植林事業を同行取材し、中国の沙漠や植林状況、街並み等の一部を収録している。この緑化事業で日本のマスコミが取材したのは初めてであり、貴重な収録である。

### 第3回植林緑化派遣団参加者（27名）

役割・班	氏名	役割・班	氏名	役割・班	氏名
特別団長	東門 美津子	1班・班長	高倉 誠二	2班	益子 孝雄
団長	佐藤 晴男	1班	増田 隆哉	〃	山本 賢二
副団長	石川 昇	〃	北原 淳弘	3班・班長	大村 雄三
事務局長	鎌田 篤則	〃	佐伯 久	〃	湯本 憲正
事務局次長	平岡 伸	〃	小関 仁美	〃	竹村 善和
記録	林 英利	〃	遠藤 健司	〃	大湾 充
〃	福永 健志	2班・班長	掛村 政則	〃	野々下 直人
〃	池田 一稔	2班	内藤 健治	テレビ大分	衛藤 修二
事務局	田中 毅	〃	奥山 浩樹	〃	佐藤 敬士

#### 寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト／寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業

事業主催団体	IFCC 国際友好文化センター
事業助成団体	日中緑化交流基金
推進協力母体	緑の架け橋推進センター
中国側カウンターパート	中華全国青年連合会
事業実施機関	2002年～2007年